

Active Learning の理論と実践に関する一考察
LA を活用した授業実践報告 (5)
A study of the Theory and Practice for Active Learning #5
—Toward the Active writing—

三浦真琴
(関西大学教育推進部)

要旨

レポートも満足に書けないと学生の文章力の低下・欠落が指摘され、これを補うべくアカデミック・ライティングのための正課の科目が複数の大学に開設されてから幾久しい。しかしそれが功を奏したという実践例の話は残念ながら寡聞にして知らない。レポートの書き方に特化した文章力の育成にどのような意味と価値そして限界があるのか、真摯に問い直し、それを踏まえた上で異なるアングルから新たな取り組みを試みる必要がある。それはすでにアメリカでは **creative writing** として実践されていることである。本論文はアカデミック・ライティングに特化することなく文章力を磨くために試行錯誤を繰り返してきた実践の報告をするものである。論者は“lifelong writing”を目指しているが、その準備をする学生の姿勢や態度にスポットを当てれば“active writing”を望み、発想や手法という視点から換言すると“creative writing”を願う、ということである。換言すると脱 **academic writing** の方角を向きながら蓄積してきたいくつかの試みの価値と可能性について言及するものであるが、最終的には逆説的ではあるがレポート・ライティングに対する苦手意識が克服される（あるいはそのように予感される）のが興味深い。

キーワード

active writing、lifelong writing、creative writing、脱 academic writing (beyond active writing)

1. 学生の文章力をめぐる問題

学生はレポートも満足に書けない。いつからか学生の文章力の低下あるいは欠落を危ぶむ声がキャンパスの中で大きくなり、アカデミック・ライティングの指導が多くの大学で正規の科目として開講されるようになった。

学生の文章力に難あると認識することも、これを等閑視せずに対応策を講じることも間違っていないと思うが、文章力とは如何なる力であるのか、それを育成するとはどのようなことであるのか、そういった根源的な問題についての思索がいささか不足しているのではないか。それが論者の懸念である。

一口に「レポートが書けない」と言うが、そもそもそれは如何なる状態を指し示す表現であるのか、レポートが書けないことが学生にとって何故

問題となるのか、それを明示してくれる論評に残念ながら出会ったことがない。学生の文章力を云々するいずれの論旨も入試の在り方などに原因を求めるものであったり、文章力を高めるためのスキルやノウハウを例示する類であったりするばかりで、大学においてレポートがきちんと書けることの意味に言及するものは希有である。

「レポートが書けない」とは課題の把握、推論、検証、分析、考察といった作業の一つ一つ、あるいはその構成に難があるのか、検証や考察の成果を言葉に頼む表現力に問題があるのか、その双方なのか、「難」のありかによって指導の内容・方法は異なるはずである。つまり一言でくくることのできない問題がそこにあると考えるのが道理である。しかしそのような論考は寡聞にして知らない。さらに、この問題が「レポートも書けない」と

表現されるとき、その論者はレポート以外の文章を目の当たりにして問題を難じているのか、あるいは幾種もある作文の中で初歩に位置するレポートすら満足に書けないのであるから他は推して知るべしと考えているのか、そのことが詳らかにされること、これまた稀である。

報告者の中には「大学はレポートの書き方を伝授するだけでよいのか」という疑問が長らくある。それは同時に「書くことをレポート・ライティングに限定することで何が生まれ、何が抜け落ちるのか」という疑問へとつながる。

ここに挙げた疑問の一つ一つについて検証するには時間とケース数が不足しているので、それは他日を期すことにして、本論では自らのうちにある疑問を授業の中で確認しながら、試行錯誤を重ねてきた実践について報告する。

2. 学生が書くことを敬遠する理由

幾多も種類があるとはいえ、入学試験を通過した学生である。文章力を全く問わない入試などありえないと考えるのが自然であるから、学生の日本語能力に大いなる欠落があるとは論理的に考え難い。しかし実際には中学生レベル、あるいは小学生レベルの作文に出くわすことがある（小学生や中学生の文章能力がおしなべて低いという意味ではなく、小中学生の中でも、はて、これは困ったと感じさせる作文例があり、それに該当するレベルという意味である）。

彼ら彼女たちに共通しているのは書くことに対する苦手意識、可能な限りそれを回避したいと願う気持ちである。後期中等教育修了者の名に恥じない文章を書くことができる学生であっても、毎回の授業で小レポートを書いてもらおうと伝えると難色を示す者が何割かいる。そこに求められるのは授業を聴いた上での感想や意見、あるいは疑問の呈示であるべきなのに、板書や聞き取った内容のメモを提出する学生もいる。このような学生にとって「文章を書く」という営みは日常的なものではなく、特別なものとして位置づけられているのであろう。それはおそらく高等学校を卒業する

までに身につけさせられた習慣である。作文を宿題として課されたから、入学試験で小論文を書く必要があるから、やむを得ず書く、対処法を覚える、そのようなことが繰り返されれば、書くという営みは楽しさから遠ざかり、自ら進んで書こうという気持ちは確実に減退していく。テーマも与えられるばかりで、自分でそれを探すという作業をほとんどしていないから、書く内容に思い当たらない。だから書き方が分からないばかりか何を書いているのかも分からないという出口の見えない暗がりになり迷い込んだように錯覚する。かてて加えて日常生活においては、悪文・醜文、あるいは誤用に周りを囲まれ、知らず識らずのうちに文章の持つ伝える力という魅力が削がれ、文章を綴ろうという意欲も奪われてしまっている。

悪文か美文かの判断は嗜好も関与するので一線を引く場所が難しいが、少なくとも誤用については、これを指摘し、同じ愚を犯さないように伝えなければならない。以下に誤用の例をまずはアカデミックな文章から示す。

著書「公的サービスの協同生産理論モデル」（1985）においてオストロムの“coproduction”概念を我が国において紹介した荒木昭次郎氏は、以後、「自治体の行政と市民—その協働システムをめぐって—」『年報行政研究 23』（日本行政学会、1989）、『参加と協働—新しい市民＝行政関係の創造』（ぎょうせい、1990）などにおいて、「協働」をキーワードとした論文著作を発表した。しかしながら「協働」とは何であるのかということについて「地域住民と自治体職員とが協働して自治体政府の役割を果たしていく」という概念であるとの説明をしている（『参加と協働』）。

同種の誤りは 2012 年の中教審答申にも見られる。この答申では「能動的学修」を定義するにあたって、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を採り入れた教授・学習法の総称。（以下略）」と説明している。

上記のいずれも、ある用語や概念を解説するにあたって、説明文中に解説される語を用いてはならないのに、その愚を犯したものである。アカデミック・ライティングの手本となるべき文章にこのような誤用が散見されるという事態を、アカデミック・ライティングの指導が重要であると考え、人々はどのように捉えているのであろうか。

誤用は学生たちにとってもっと身近なところでも数多く見られる。以下に新聞から三例を引く。

「信者獲得に大きな威力を発揮した『戦慄の予言』は、一方で教祖自身を追い込む『両刃の刃』ともなった」

—読売新聞 (1995・5・17)

「事件の数日前、少年は猫の死体を正門前に置いた。…だが、まったく騒ぎにはならなかった。少年は「無視された」と周囲に漏らした。少年はさらに社会を震撼（かん）とさせる事件を起こした。」

—朝日新聞 (1997・7・1)

「万物は流転する、といった古代ギリシャの哲学者がいた。ことばも当然、変化する。若い同僚は「愚妻なんてへりくだるのは、おかしい」という。「彼女に対する侮辱です」と。なるほど、とうなずきつつ、侮辱とは少々違うのに、と思う。」

—朝日新聞 (1977・4・22)

「両刃の刃」ではなく「両刃の剣」であり、「震撼とさせる」ではなく「震撼する」（他動詞）である。「愚妻」の「愚」は「自分」という意味であって、妻自体をおとしめる表現ではない。

いちいち原文を引かないが、「教官」の「官」はもともと「官吏」のそれであるから、大学教官とは国立大学で教鞭を執る（執った）者の呼称である。しかしながら例えば「早稲田大学時代の指導

教官」という表現が新聞紙上で散見される。「はいふ」には特定の人間を対象に配る「配付」と、不特定多数に配る「配布」の二語があるが、各紙新聞社とも規則によってどちらも「配布」と表記することになっている。この他にも新聞その他書籍における誤用の例は枚挙にいとまがない。

文章を編むに当たって対処療法的な学習状況に身を置いてきた（置かされてきた）学生が世の中にある数多の文例に倣おうとしても、あろうことか日本語の乱れを指摘する任のある新聞にさえ大いなる誤用があるという状況に包囲されているのであれば、レポートを書くための作法をいくら注入しても、では是非書いてみようという気持ちはなかなか芽生えてはこない。よしんば生まれたとしても、遅かれ早かれ何を手本にし、何を信ずればよいのかがわからなくなるから、やがて壁にぶつかってしまう。

初等・中等教育を通じて身につけて（身につけさせられて）しまった作文に伴う苦痛の予感、嫌悪感、不安から学生を解放し、巷に誤用・悪文の溢れていることを認知したうえで正しい使い方を身につけながら書く楽しさを体験・実感すること、それを積み重ねていけば生涯のいかなる場面、局面においても書くことを懼れず、諦めずに、いや、書くことの積極的・肯定的な意義を見つけ出せるようになること（これを報告者は **lifelong writing** と呼ぶことにしている）、与えられたテーマをいかに料理するかという **“How to write”** にまして、自分の中に書くべきもの、書きたいことがあることを発見・発掘すること、すなわち **“What to write”** を常に意識すること、以上が報告者の担当する『文章力をみがく』の主たる柱である。

以下に、LA の支援に助けられながら展開してきた実践について報告する。

3. 書く意欲を引き出すためのいくつかの仕掛け

3-1 テーマを決めない

第一回目の授業ではテーマを与えずに何でもい
いから書いてくださいと指示する。テーマを与え
られることに慣れきっている学生は戸惑うが、や
がて教室内に静謐な時が訪れる。書き始めから小
半時を過ぎたあたり、机間を巡りながら見てみる
と、ほとんどの学生が A4 版のレポート用紙の 4
割以上を文字で埋めている。授業終了を待たずに
ほぼ全員が用紙のすべての行を文字で満たすのが
例年の授業風景である。中には裏面にまで及ぶ者
もいる。すなわち「書く素材」は与えられずとも
自ら発見できるということである。日頃、そのよ
うな省察を重ねる習慣を持たないから、自らのう
ちに素材があることを知らないだけである。

木へんに風と書いて楓、というのが私の名前です。誰もが
知っている、秋に葉の赤くなる樹の名前です。名付けた父
は、「赤の似合う女の子になってほしい」と思ったようで
すが、小さい頃の私の好きな色はずっと水色でした。どち
らかと言うと赤など強い色は嫌いでした。しかし、中学生
になり自分だけの部屋を持つようになると、父が毎週のと
うに赤のインテリアグッズを買ってきて、私の部屋に置い
ていくのです。その部屋の中で過ごす私は、いつの間にか
赤が一番好きになっていました。実は、楓という樹には
色々な種類があり、名前も様々なのですが、驚いたのは「コ
ハウチカエデ」。おいしい。ちなみに「サトウカエデ」もあ
るのですが、母の旧姓は「佐藤」。離婚したら私は「サト
ウカエデ」です。秋になるとまっかに紅葉する楓ですが、
私も寒くなってくるとひふがうすいのか、顔がまっかにな
ります。名前のせいかもしれません。(2009 春)

いつもなら隣山の鳥親子の声で目が覚める。しかし、今日
は違った。朝日が直接私のぶ厚い毛皮に差しこんできたの
である。思わず「暑い！」と言って起き上がり、早起きな
太陽にイラっとした。そして、ゆっくりと洗面所へと向か
った。すると、またしてもいつもと違う光景を目の当たり
にして驚いた。洗面所の水が全て干からびているのである。
それどころか、岩場で昼過ぎまで寝ている魚の姉妹までみ
あたらない。そこでやっと私の目が覚めた。冷静に辺りを

見まわすと、いつも当たり前のように立っていた木の長老
たちが全員いなくなっていたのである。(2010 秋)

大阪はとにかく人が多く、田舎者の私にはこれだけの人が
どこからわいてくるのか不思議でした。黒いスーツの通勤
の人々は私の動体視力では追いつかない速さで私の横を
難なくすり抜けて行きます。私には大きな黒い影がせまっ
て来ているようにしか見えませんでした。昨日、昼過ぎに
全ての予定を終えた私は、普通電車でのんびりと滋賀まで
帰ることにしました。日差しが肩に降り注ぎ、窓から見え
る桜並木にとても心が弾みました。大阪は暖かいので、も
う桜が満開の所も多いのです。線路沿いに咲く桜を、最後
尾の車両一番後ろから見送るのが私のお気に入りとなり
ました。朝のモノクロの景色からは想像できない、この季
節一瞬の美しさです。それぞれの季節にそれぞれの色があ
り、匂いがあり、温度があります。毎年同じようで少し違
うけれども、まれに何らかのきっかけでデジャヴュのよう
な感覚が生まれる。この匂いをどこかで嗅いだことがある
気がする、という一瞬が、過去を二度味わえた気分になれ
て、とても大好きです。そのため私は出来るだけ様々な季
節は時間を覚えるように心がけています。風の匂いや階段
に差す陽光など、何気ない一瞬の、ふと季節を感じられる
ワンシーンを心の奥に留めて大切にしておきます。写真で
は決して思い出せない、人間の記憶だけが持つ特権であり、
これからもこの季節を大切にしていきたいです。(2011 春)

私が所属しているサークルでは、貧困に苦しんで住む場所
に困っている人のために家を建てるお手伝いをしている。
この夏はタイのある家族の家を建てるお手伝いをしてく
いた。この家族は両親と幼い娘が一人いる若い家族で、いと
この家に居候させてもらっていた。私たちが作業をしたの
は 8 日間。柱と屋根は既に作られていて、私たちは床や壁、
トイレなどをつくった。むこうのご両親は仕事で忙しい中、
時間が許す限り建設作業に参加してくれた。家は無事建っ
て、むこうの家族は彼らの家を持つことができた。世界に
は貧困や飢餓に苦しんでいる人がたくさんいる。日本にも
それらに苦しんでいる人がいる。しかし、タイで家建設活
動を支援している現地の人が「タイには苦しんでいる人が
たくさんいるけれど、だけど君たちが手伝ってくれたおかげ
で一つの家族が救われて幸せになることができた。だか

らとても感謝している」と言ってくれた。貧困問題など、キリがなくて解決することは困難のように思えるが、私たちが何か行動を起こすことで徐々に解決していく可能性があるのだ。(2012 秋)

「書くこと」は、自分の中に書きたいもの、書くべきものがあることを発見、確認するところから始まる。書くことが見つからないのは探し方、つまり自分への省察が足りないからである。その場合には、何故、書くものがみつからないのかという自らへの問いが足がかりとなる。問わずして考えることはできない。考えずして書くこともできない。書くためには自らに問うことが不可欠なのである。意識してか、さにあらずか、自問というステップを経て、学生たちはやがて日頃漫然と見送っている風景の中に、一瞬、目を留めた時間のあったことを思い起こしたり、同じ事の繰り返しと捨て置いた毎日が実は違う時の積み重ねであったと気付いたりする。アンテナやセンサーを携え、その感度・精度を磨いておけば、書きたいことやものは毎日泉から溢れるごとくになるはずである。しかし、そのことを科目担当者は敢えて言の葉に載せない。LA が巧みにそれを伝える文章を受講生に示してくれるからである。

今日はあいにくの雨だ。私はこの「文章力を磨く」の授業は2回目である。4月に私は何を書いたらろう。確か大学に入って感じたことを素直に書いた記憶がある。あの頃は何かもが新鮮で、毎日が忙しかった。当時と今の私とは大きく違っている。私はもう大阪駅の黒い人の塊の間をすり抜けられるようになった。自分で働いてお金を稼ぐようになった。友人の家で寝泊まりするようになった。お酒はまだ飲めない。19歳になる日が近づくにつれて、私は“大人になる”ことを嫌がるようになった。日々変化していくことに不安を感じている。高校の時はあれだけ毎日のように見あげていた夏の夜空を、今年は何度見あげただろう。“大人になる”ことを恐れるのは、自由と責任の重さから逃げ出したいからではなく、漠然と何かを失っている気がするからだと思う。年を経るにつれて得られることも数多くあると知っていながら、泣きたくなるような不安はおさまらないでいる。連続する私の身体に一つの区切りが

訪れるまであと一年とちょっと。(LA2011 秋)

秋学期が始まったので、何か新しいことを始めたいと思い、最近ずっと考えていました。少し前に、バイトの帰り道に手帳を開いて予定を見ていると、肩をとんとんと叩かれ、「落ちましたよ」と私が知らない間に落としていたお守りを若い女の人が手渡してくれました。いつも手帳にはさんで持ち歩いていた大事なものだったので、その女の人にすごく感謝しました。この出来事があった、そうだ！その日に会った親切な人や感謝したい人にラブレターを書こう！そしてそれを日記にしよう！と決めました。秋学期一日目の今日からさっそく始めます。(LA2011 秋)

私の家には地球儀がなかった。そのせいだと思うことにしているのだが、私は小学三年生まで、外国にロケットで行くものだと思っていた。つまり、海の向こうではなく、宇宙の向こうにあると思っていたのである。地球という丸い惑星に一国ずつ国がある。そういうイメージを持っていた。むろん、It's a small world.は知っていたのだが、「世界は狭い、地球は同じ ただ一つ」という歌詞を聴いて、「何かもあるのにウソを言っている！」と思っていた。／もう一つ話をしておくと、淡路島はビワ湖の辺りをくりぬいて作った島だと思っていた。…なんとなく大きさが似ていると思いませんか？とてつもなく大きなクレーンがあって、それで今の場所に淡路島を運んできたんですよ。そうじゃないとあんなところに穴が空いている（ビワ湖のこと）説明がつかないと思っていた。何が話したいのかというと、私が地理が弱い…とかそういうことではなく（実際、弱いけど）、この授業ではそういう子どもが考えるようなとっぴょうしもないアイデアを求めているということ。子どものころにはどんなことを考えていたらろうか？一度、それを思い出して文を書くと、案外、スイスイ書けますぞ！(LA2012 春)

昨日、お父さんとケンカをしました。就職活動がうまくいかず、軽い気持ちで「もう就活したくない」と言ったことにとても怒ったのです。お父さんにあれこれ言われているうちに、本当に就活やめてやろうという気になり、昨日はパソコンやメールは一切見ず、映画を3本見たり、本屋さんへ行って2時間くらい立ち読みをしました。その後は桜を見に京都の木屋町へ行き、現実逃避の一日を過ごしまし

た。ずっと我慢していたことができて、すっきりした気持ちで家に帰ると“どうしてあんなに私は怒っていたんだ、親だから心配するのは当たり前か”という気持ちになっていました。今朝、お父さんにメモを書き残してきました。「お父さんへ、息抜きしたから、また頑張れそうです」(LA2012 春)

「先輩」：あれやこれやとしている間に、いつの間にか二回生になってしまった。ついに「先輩」になってしまったのだ。「後輩」という、かわいくも恐ろしい存在の人達がやってくるという事実におびえながら毎日を過ごしているわけである。満開に咲いている桜の下を歩いていく新入生を見つめながら、私も昨年はあんなにフレッシュだったのかと、しみじみ思うと同時に、「私、先輩なのか」と愕然としながら勧誘のピラを配る。でも、ふと思った。私より年下の人たちからみれば私はもちろん「先輩」だが、私が「先輩」と読んでいる人たちが観れば私は永遠に「後輩」なのだ。「先輩」と「後輩」が逆転することはない。そのことに少し安堵した。結局は環境の変化が怖いのだ。自分が関わるのはもちろん、範囲外で起こっている争い事を見るのも嫌だ。でも毎日同じでも刺激を求めてしまうし、厄介な奴だなと満員電車の中で押しつぶされそうになりながら考える。最近ようやく「二回生です」という自己紹介にも慣れてきた。真面目だと思っていたとある後輩が意外と面白いキャラだった。何が言いたいかという、「先輩」も案外悪くない。(LA2013 春)

初回に受講生ならびに LA が書いた文章は次回の授業時に『文鷹通信 其の壺』として配付する。学生はこの通信を通して他の受講生ならびに LA の文章を読み、個々の作文に対して感想や意見、質問などを寄せるのだが、ここで、文章を書けば読者が（それが数年後の自分だけである場合も含んで）必ず発生することを体感する。読者が存在するからには独善的な書き方、内容の選択は意図的に回避すべきであることを学生は学ぶ。さらに無題であった自らの文章に題名をつけるという作業をおこない、題名が作品の重要な一部であることを彼ら彼女たちは知る¹⁾。

読者からの感想や意見（授業ではこれをファン

レターと称している）は、文章は読者によって受け取り方が一様ではないことを知るためにも、しかし是が非でも伝えたいことを意のままに伝えるためにはどのように内容を精選し、構成するか、それを表すにあたってどのような言葉を選ぶのがよいのか、それを考えるためにも、恰好の機会を与えてくれる。紙幅に限りがあるので割愛するが、LA からのファンレターは受講生にとって大きな励みになっている。

3-2 言葉で素描

夏目漱石の作品の中から「松」が登場する場面をいくつか引用する。

実際窓外の眺めは大阪を今離れたばかりの自分達には一つの変化であった。ことに汽車が海岸近くを走るときは、松の緑と海の藍とで、煙に疲れた眼に爽やかな青色を射返した。木蔭から出たり隠れたりする屋根瓦の積み方も東京地方のものには珍らしかった。(行人)

一方には空を凌ぐほどの高い樹が聳えていた。星月夜の光に映る物凄い影から判断すると古松らしいその木と、突然一方に聞こえ出した奔湍の音とが、久しく都会の中を出なかつた津田の心に不時の一転化を与えた。彼は忘れた記憶を思い出した時のような気分になった。(明暗)

「あの松を見給え、幹が真直ぐで、上が傘の様に開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野田に云うと、野田は「全くターナーですね。どうもあの曲り具合ったらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから黙っていた。(坊ちゃん)

文豪の巧みな筆致であるが、いついかなる時でも「松」をこのように描写できたわけではないらしい。明治40年3月28日、東京から大阪に向かった時の日記には「海道の松。広重。山の上の松。」と記されたあとに、松の木のスケッチが描いてあり、「コンナノガー一本立ツテ居ル」との注釈が加え

られている。短時間で車窓を通り過ぎる複雑な木の枝や葉の様子を言葉で描写するのは容易ならざることかもしれないが、スケッチならさほど難しくはなく、のちにそのスケッチをもとに文章を練ることもできる。大切なのはそのように素材を確かな形で残しておくことである。確かな形で残しておくためには注意深い観察が必要である。そのいずれをも体験してほしいと願った科目担当者は、夏目漱石のこのエピソードにヒントを得て、およそ 60 分という時間の中で「何か」をスケッチすることを学生に求めたことがある²⁾。

「春風ギンガムチェック」

春のキャンパスを歩いた。5 月は緑の季節。思い思いに着飾ったり、笑ったり。もうツツジの水玉模様。校舎の袖を彩る。細かい葉っぱはちりめん素材。ほっそり涼しげ細い枝。頭上にとどろき。見上げると千の鳥。千鳥模様の大きな木。イチヨウのモザイク。シダレザクラのモール。マーガレットは風と遊んで笑う。「くすぐったいよー」と照れ笑いする。パンジーはいつも Yes と言わない。春の空は澄んでいる。午後はきっと暑くなる。深呼吸を木々と一緒に風に乗せて。今日もまた一日が始まる。(2011 春)

「秋風にのせて」

今日は生憎の曇り空で、それもアクリル絵の具をチューブからそのまま塗ったような不透明な空。ジェットエンジンがごうごうと空気を震わせているのに、飛行機の姿はどこにも見当たらない。しかしそよ風は心地いい。まっさらなシーツに身体を包まれたときの温度と似ている。風が髪を持ち上げては、ひやりとした手で首筋や耳の後ろを撫でた。花崗岩の椅子に腰掛ければ、柔らかな冷たさがてのひらから伝わって、後ろを歩く人々の足音さえ遠ざかる。木のざわめきだけが世界に残された。朝の澄んだ風が金木犀の香りを運んできた。忙しく動かす足を一時休めて、甘く爽やかな、煮詰めたアンズジャムのような香りを胸いっぱい吸い込む。余裕のない朝の最高のご褒美である。もう少しすれば、このキャンパスは真っ赤に染まるのだろうか。まだ緑を残す木々を見上げて、紅葉のトンネルを思い描いた。(2011 秋)

「ようこそ風様」

図書館の緑の壁がウェーブしている。小さく波うって、波うって、波うって。立ち上がって万歳をしては座る、を繰り返している。もしくは、小さな緑の手で懸命に拍手をくりかえしている。黄色がかった大きな葉も、集まっている緑の小さい葉も全部、全部、一族総出でお出迎え。拍手するのは壁の葉だけで、周りの他の緑、たとえば木などは、歌えや、踊れやとにぎやかだ。シャラシャラザラザラ勝手に合唱、歓迎された側も嬉しくなったのか、参加して、どういうわけか、水音、飛行音も混ざって、アドリブしかない演奏状態。それに合わせて踊るのだから、しっちゃかめっちゃか、枝同士の衝突事故が起ってしまう。日光が映す影が美しい。キラキラ光る海面にも似ている。たとえそれが枝と枝との事故現場でも。生き物だって飛んで喜ぶ。黒いハネに淡く緑さした青の模様。そんな蝶がツツジとユキヤナギの葉の中に潜っていた。このあいだの春の嵐では身を震わせて、ちぢこまって耐えたものだ。しかし、今回は目に砂が入らないように手で防ぐだけ。春全開の風、五月の風、新緑が喜んで迎える風。まあ、でも、薫風にしては少し…いや、かなり強すぎるかな。折れた枝が飛んで行く。(2012 春)

文章の素材を屋外に探しに行くのは学生にとって新鮮であるらしく、教室の中で自らの経験を思い起こしたり、想像をめぐらせたりしている時よりも筆致が頼もしく感じられる。目の前の風景から過去のシーンが想起され、時の経過に伴う心象風景の描写をする学生もいる。これらの作品についても LA は豊かなコメントを付してくれる。受講生がいよいよ自らの執筆に愛着を感じ始める時の到来である。

3-3 ファンタジーの文法

以上のプロセスを経た後、受講生は『ファンタジーの文法』の世界へと誘われる。『ファンタジーの文法』とはジャンニ・ロダーリの著書ならびに実践につけられた名称であるが、報告者の授業においては創造的想像力を駆使して物語を編む営みのことを指す。より具体的には二つの異なった概

念を持つ言葉を結び付けることによって異化（ストラニアメント）効果を体感し、それを物語へと反映させてゆくのだが、異化効果に伴って発生する違和感が物語を広げていく大切な要因の一つとなることを体験する。

「ことばは日常の意味で取り上げられるものではなく、日常的に果たしていることばの鎖から解き放されるものである。言葉は互いに《引き離され》、《流浪させられ》、まだ見たこともない異郷の空でぶつけ合わされるのである。こうすることによって、ひとつの物語を生み出すよりよい条件があたえられることになる。』（ジャンニ・ロダーリ、p.42）

ロダーリの唱える「ファンタジーの文法」とはファンタジー小説を書くためだけに必要な発想なのではない。何かを書くためには「発見」が必要であるが、この「発見」のレッスンには「二つの異なった概念」を「結び付けようとする」ドリルが効果的である。学生は配付された二色のカードに一語ずつ記し、それぞれのカードをカードと同じ色の箱に入れる。双方の箱をシャッフルしてから交互に一枚ずつを取り出し、二語の組み合わせを作る。受講生の数だけ組み合わせが生まれる。その中から気に入ったものを選び、物語を編んでいく。以下に、受講生の作品ならびに LA の作品を一編ずつ紹介する。括弧の中は作られた二語の組み合わせを示す。

再就職（エレベーター×サーカス）　〔サブタイトル：就活したくない〕

エレベーターが動かない。高田は辞表を上司に渡しに行く途中だった。大きなビルの大きなエレベーターには高田と、見るからにカラフルな「普通ではない」格好をした団体が取り残された。高田はつい辞表の入った茶封筒をくしゃりと握りつぶした。その音がやけに大きく響き渡る。

「あなたもしかして死にたいんですか」

後ろに立っているピンク色の髪の青年が聞いた。

高田はその物騒な質問に驚きながらも咄嗟にうなづいた。別に死にたいわけではない、しかし生きていたいわけ

でもない。ピンク頭は高田の手をつかみ、振り向かせると「ならばサーカスにお入りなさい」と言った。

ずっと操作盤を見つめていた高田は後ろの華やかな連中がこんなにもニコニコとしていることに気付いていなかった。エレベーターが止まって彼らも不安だろうに。しかし彼らはそんなこと気にしているようでもなく、不可思議なメイクをした顔を黙ってこちらに向けている。

臆さなくても良いのです。サーカスに入れば退屈がありません。世界中を巡ります。そして時々この世界以外にも行くことがあります。毎日が刺激的です。どうでしょう。私達はあなたをスカウトしているのです。死ぬくらいならサーカスにお入りなさい」

高田は彼らの服装をしている自分を想像した。似合わない。

「私にはできないでしょう。その服も派手すぎます」

「今、このエレベーターの中であなたの服の方が異端ですよ。真っ黒で個性がなくて堅苦しい。つまらない。そんなもの脱いでおしまいなさい。あなたはサーカスに入るべきです」

高田はもう一度うなづいた。そうか、死ぬくらいならサーカスに入ろう。ピンク頭はニヤリと笑って指をパチンと鳴らした。すると薄暗いエレベーター内に明るい音楽が鳴り響き、団員が技を披露し始めた。エレベーターは急に動き出し、ぐんぐんスピードをあげ上がっていく。高田は辞表で紙吹雪を作ると、小さなサーカスの上にそれを降らせた。それでいいのだと、誰かがつぶやいた。エレベーターはどこまでも上がっていく。　（2013年秋学期）

「私の勝ちね」（ハワイ×感謝）

きっかけはいつも些細なことである。いつもなら笑って許せるようなことでも、その日の体調によって言っただけいけない一言をこぼしてしまったり、あからさまにため息をついてしまったりして「戦争」が勃発する。そして、一旦落ち着いたあとに焦点が当てられるのが、どちらから謝るかである。明らかにどちらか一方が悪い場合はまだいい。どちらにも非がある場合が一番面倒なのだ。「冷戦」状態が続くと精神的にも厳しくなるのだが、やはり日常生活にも支障が出てくる。これはまずいとようやく焦り始めて、なんとかコミュニケーションをとろうとするが、長期間会話をしなかったために「話しかけ方が分からない」という

自分でも驚くような壁にぶち当たる。

今まではそんな壁が現れる前になんとか終結させていたのだが、今回はお互いに譲り合わず、冷戦に突入してついに十日目になる。さすがに疲れてきた。妻は相変わらず「晩ご飯自分の分しか作らない」作戦を執行しているので、家に帰ってひたすら待っていても何も出てこない。最初のうちはコンビニ弁当や外食でなんとか耐え凌いでいたのだが、そんな生活も一週間が限界だった。家でゆっくりご飯をたらふく食べたくなり、一人暮らしをしていた二十代の頃を思い出してなんとか三品ぐらい作ってみた。それはそれで楽しく味もまあまあ良かったので、料理人に向いているんじゃないか、となんととも能天気なことを考えていたが、洗い物をしなければならぬことに気がついて、コンビニ弁当で済ませれば良かったと後悔した。妻はこんなに面倒なことを毎日やっているのかと驚愕し、少し反省したがまだ謝る気にはなれない。何かきっかけがあればいいのだが……と考えているうちに、いつの間にかリビングで寝ていた。毛布はかかっていたいなかった。

冷戦開始から十四日目。とうとう二週間も口を利かなかった。こういう、どっちつかずの態度でいるから嫌われるのかもしれないな、と思いながら家へ帰る。どれだけ家での居心地が悪くても、仕事が終われば勝手に足が家の方へ向くのが不思議である。結局私の居場所はあそこしかないのだ。私の全てを受け入れてくれる人は妻しかいないのだ。早く謝らなければ。でも、きっかけが…

「ガラポン大会開催中！一等はなんとハワイ旅行ペアチケット！！」

もうこれしかないと思った。そこはいつもの帰り道にある小さなコロッケ屋だった。もう二十年以上は続いているようなお店で、夕方は学校帰りの中高生や常連客で賑わう。コロッケ屋でガラポン大会、しかも一等がハワイ旅行なのはよくよく考えるとなんととも面白いが、そんなことを考えるより先に店に入っていた。どうやらコロッケ二個で一回ガラガラが出来るらしかった。一個五十円なので、もしかすると百円でハワイ旅行…破格だ……。試しに四個買って二回ガラガラをやってみた。見事に残念賞のティッシュだった。ここで引き下がるわけにはいかない。さらに二個買ってみた。ティッシュ。もう二個。ティッシュ……お客さん、もうそろそろ……と言われて我に返ると二十個ものコロッケと十個のティッシュを手にしてた。こんな

の、喜ばれるどころか怒られるだけじゃないか。袋の隙間から漂ってくるコロッケの匂いで少し胸焼けしつつ家に帰ると、リビングからコロッケの匂いがした気がした。しまった、今日の晩ご飯もコロッケなのか。私一人でこの二十個のコロッケと戦わなければならないのか。さらに胸焼けが酷くなった気がした。恐る恐るリビングを覗くと、なんと私が持っているのと同じコロッケ屋の袋がダイニングテーブルの上に敷き詰めることが出来るほど置いてあり、椅子には少しうなだれた妻が座っていた。

「どうしたんだよ、この大量のコロッケ……」
私が帰ったことによりやく気がついた妻は私の顔を見て「ガラポン…」と呟いた。そして私が持っているコロッケの袋を見て「あんたこそどうしたのよ、それ」と指差した。私が思わず、ふふ、と笑うと妻も理解したようでげらげらと笑いだした。そこからしばらくはお互い笑いが止まらなかったが、食卓に全てのコロッケを並べてみると二人とも顔が引きつった。

妻は私よりもさらに多い、二十八個のコロッケを買っていた。
(LA2013年秋学期)

一般に LA にはファシリテーションやプレゼンテーション、コミュニケーションに関する資質や能力が求められるが、この科目を担当する LA には、これに加えて豊かな文章表現力が求められる。とはいえ、誰もが等しく卓越した文章力を携えているわけではないし、その必要もない。より大切なのは、自らの文章を幾度も推敲し、よりよいものへと変えていこうとする意欲と姿勢である。科目担当者が名文・美文をそっけなく提示するよりも、年齢に近い LA が悪戦苦闘しながら文章を編みこんでいく姿、その過程と成果を示す方が受講生の執筆意欲は喚起される、というのが、これまでの科目担当経験によって知りえたことである。

3-4 無声映画に字幕をつける／『〇〇する日本語』を編む

「ファンタジーの文法」はおおむね例年好評で、再放送を望む声大きい。受講生の数だけある組

み合わせのうち、誰も手をつけなかったものにチャレンジするために、あるいは既に誰かが利用した組み合わせに違うアングルから新たな作品を編み出すために、場合によっては二語を三語に変えてトライするために、セカンドステージを設けてきた。しかしながら科目担当者と LA の中に微小ではあるがマンネリ感のようなものが漂い始めた。受講生にとっては初めての経験なので、そこにマンネリ感はないが、教室の中にマンネリ感を覚える者がいれば、それはなんらかの形で受講生に伝わる。それを懸念して、今年度秋学期には新しい仕掛けを導入することにした。

その一つが「無声映画に字幕をつける・無声映画の脚本を書く」である。実際には最近の映画の DVD から多様なシナリオや台詞を想像できそうなシーンを選び、2~3分のレンジでカットしたものを映画のタイトルが分からないように配慮しながら受講生に見せる。今回は四作品を LA が選定し、素材を作ってくれた。受講生が練り上げたシナリオや台詞はどれも面白いものであったが、映像を伴わなくては面白さを伝えられないので、遺憾ではあるがそれは割愛する。

その他に導入した新機軸が「〇〇する日本語」である。これは小山薫堂の『恋する日本語』にヒントを得て授業での展開を試みたものである。普段、めったに引くことのない辞書の頁をめくりながら自分の知らなかった単語を選び、その単語から連想されるシーンを描写する。描写ののちに単語の語義が示され、なるほどと読者に思わせる。そのような構成の作品を編むように提案したところ、かなりの出来栄の作品が生み出された。そのうちのいくつかを以下に紹介する。また、それぞれの作品に対する科目担当者のコメントも付す。先に紹介した『文麿通信』では受講生ならびに LA の作品を掲載するのみならず、その作品に対する科目担当者からのコメントも載せている。これまでは紙幅を勘案して割愛していたが、以下の作品についてはコメントも合わせて紹介する。なお、LA へのコメントは受講生に対するコメントよりも厳しいことが多い。

『湮没 いんぼつ』

“一緒にいて楽しい”の上には、
「気を遣わなくていいから」がつく。
“いい人”の上には「どうでも」がつく。
“優しい”の上には「みんなに」がつく。
それってつまりは特別じゃないって話でしょ。

【湮没】すっかりうずもれて見えなくなること。

【科目担当者から】おそらくはじめからそのような感情を抱いていたのではありませんね。月日を重ねるにつれて、どことなく物足りない、なんとなく愛情不足を感じる、そんなちいさな不安や不満がつもりつもり、ついには相手が実に煮え切らない男に見えてくる、珍しいことではありませんが、それを巧みに表現して下さいました。こんな風に言われて襟を正さなければ、そいつあ男じゃないね。

『追懸け おいかけ』

「ただいま」
いつも玄関で迎えてくれる妻の姿はなく、なぜか部屋も真っ暗だ。不思議に思いつつ中へ入ると、妻がテーブルにぼつんと座り、静かに泣いているのだ。
「どうしたんだよ、加奈」妻の元に向けよると
「あなた浮気してるでしょ」とだけ一言。
…なぜバレた。携帯もロックをかけてるし、会うのは妻が実家に帰っている時だけ。なぜだ、どうしてバレた、どこでバレた。
「何言ってるんだよ！そそそそんなわけないじゃないか」
「友達があなたを見たって…」
友達かー!!!そこは全く気にしていなかった。
「すみませんでした」
「…ウソ。本当に浮気してたの、信じられない」

【追懸け】かまをかけること。相手の包み隠していることを探るため、知らぬことをよく知ったように言って聞き出す戦略。

【科目担当者から】世に妻の直感ほど当たるものは他にないそうです。自然に振る舞っているつもりでも、必ずどこかに不自然な綻びができてしまうのでありましょう。浮気

したって、なにひとついいことなどないのに、どうして、こうもまあ、世の中の男性（だけじゃないけれど）は、そこにながしかの希望めいたものを見いだそうとするのでしょうかねえ。それにしても、なぜ「それは人違いだよ」と言えないのでしょうかねえ…。

『扞格 かんかく』

寂しい時は彼を呼ぶ。

彼とはつきあっているのでもなければ、彼のことを好きでもない。

なぜ彼を呼ぶのかというと…寂しいからだ。

「…おまたせ」

電話ひとつで彼はすぐに私の所へ来てくれる。

けれど、彼も私のことを好きではない。

なぜ来てくれるのかというと…彼も寂しいからだ。

私達は、どこからともなく身を寄せ合う。

言葉を交わすわけでもなければ、心をふれあわせることもなく。

私は私自身を拒みながら、彼のぬくもりなしでは生きられない。彼もきっと、私と同じだろう。

【扞格】互いにこばみ、とどめること。相容れぬこと。
(美矩)

【科目担当者から】このようなシーン、シチュエーションを何故、想像（創造）したのか、気になります。ヘーゲルは「知性としての想像力は再生産的である」と言っています。なるほど、経験あるいは経験的感覚がベースになれば何も想像できないですものね。ということは…う〜んと、え〜っと、というように気になります。ベースが誰かの小説なのか、ご友人の実体験なのか、それとも…という風に想像が止まりません。

『玲瓏 れいろう』

ある日の夕方、真っ赤に輝く夕陽に向かって歩く彼は、まるで周りにある全ての輝く物を避けるように目を伏せ、一步一步足を家へと向けていた。

風にそよぐ雑草たちを目で流していると、ボールが転がってきて、彼の足元で泊まった――

私は腰をかがめ、ボールに手を置くと、「おじさん、ありがとう！」という澄んだ声が聞こえた。顔を上げると、そこには後ろに輝く夕陽に負けないくらいの笑顔の少女が立っていた。

【玲瓏】美しく照り輝くさま。玉などがさえたよい音でなるさま。
(LA)

【科目担当者から】前半の動作主が「彼」、後半のそれが「私」に替わっていたので、この二つの部分をつなぐために前半の最後を「――」で終わるようにしました。つまり、前半は遠景としての描写、後半はそこにいる「私（おじさん＝中年男性）から見た近景、という構成にしたということです。▼「玲瓏」とは通常、風景や風景を構成するものを描写する時に使われる言葉です。これを「少女（の笑顔）」を修飾する言葉として文を編んだところに作者のセンスがうかがえますね。夕間暮、ボール遊びに興ずる子どもたち（最近、とんと見なくなりました）、人なつっこく屈託のない笑顔、弾むような声。それは「おじさん」の眼前にある風景なのですが、間違いなく「おじさん」にノスタルジーをもたらすものですね。その「仕掛け」が心憎いと思いました。

今回の試みは受講生には快く受け入れてもらえた。LAにとっても初の試みであったため、彼ら彼女たちは自らの経験を活かすことができず苦心していたが、その姿勢が受講生には親近感とモチベーションを与えるものになったと報告者は感じている。

4. 最終作品の完成に向けて

上記の複数のステージを経たのち、受講生は最終作品の制作にとりかかる。ここに至るまでに受講生はグループワーク（「〇〇する日本語」以外）とパーソナルワーク（「〇〇する日本語」）の双方を体験しているが、最終作品はグループワークによるものとしている。メンバーがそれぞれに育ててきた創造的想像力を相互に確かめあいながら、刺激することで、斬新かつ壮大な作品が編まれることを期待できるからである。

最終作品のテーマ、ボリューム、発表形態のいずれも自由である。作品のねらいやねがいが読者にもっともよく伝わる手法を選ぶことも制作の大切なファクターだと考えるからである。この作業には LA はあまり深く関わらないようにしてもらっている。受講生が LA に依存することがないようにするための配慮である。とはいえ、グループワークの進捗状況に不安が感じられるような場合、作品のコンセプトに対する意見を求められるような場合には、「答え」を示さないように配慮した上での対応をしてもらおう。この作業は LA にとってかなりの負担になるが、例年これをつつがなくこなすばかりか、科目担当者との共同制作にも参加する。

共同制作は 2011 年の秋学期より開始した。最終作品の完成にむけて大詰めが近付くと、もはや LA がグループワークに関与する機会が少なくなるので、空いた時間を有効に利用するために科目担当者が提案し、それに LA が応じてくれて始まった営みである。その作品は受講生に配られるほか、次期以降の授業でも配付される。これを読んだ次期以降の受講生は自らが目指すべき作品のスタンダードを決めることができる。新たに配属された LA も大いに刺激を受ける。2012 年の春・秋学期ともに LA と科目担当者の共同制作は継続し、四作品を合冊したものは文学フリーマーケットに出展した³⁾。

今年度秋学期は数対四字熟語をベースに据え、中でも「千と万」の入った四字熟語をもとに物語を編んだ。全編を掲載したいのだが、紙幅の関係で一編のみを載せる。

Love for Sale

私が初めてのぶちゃんのお店を訪れたのは三年も前のことになる。

その日は彼と会う約束をしていたのだが仕事が片付かず、約束の時間に間に合いそうになかったので彼にそのことをメールで連絡すると、じゃあ他の日でもいいと言われてた。この日のために仕事も頑張ったし予定も空けておいたのと思い、もう少し待ってくれるよう頼んだのだが、待

つのは嫌いだと言われ、それ以降返信もなかった。二時間も三時間も待っててくれと言っているわけでもないし、どこかで時間を潰していれば済む話ではないか、と怒りたいような泣きたいような気分で会社を出て、通りをずんずん歩いていた。そのとき、がくと右の膝が折れ、地面に座ったような形になった。何が起こったのか分からず、茫然としていた私に声をかけてくれたのがのぶちゃんだった。紫のスパンコールのワンピース、赤に染められた短い髪、濃い化粧、黄色い大きな三角形のイヤリング、十センチはある緑のハイヒール。なんて派手な人だろうと思った。右足のヒールが折れたことが転倒の原因だったようで、のぶちゃんは、接着剤があるからと言って私をお店まで案内してくれたが、どんどん細い道へ進んでいくのでだんだん怖くなった。突然の出来事だったので言われるがままについてきてしまったが、よく考えたら全く知らない人についていくなんで危険すぎるのではないか。それに、ありえないほど派手な格好をしているせいで性別も分からなかった。逃げようと思ってゆっくりと後ずさりをしたとき、のぶちゃんは足を止めて振り返った。どうやらお店についてしまったようで、ちょっと入りにくいかもしれないけど遠慮しないで入って、と扉を開けてくれた。煌びやかな看板を見て少しぎょっとしたが、カウンターに沿って椅子がずらりと並んでいる店内は意外と広く、壁も茶色で落ち着いた空間だった。何人かいたお客さんは全員男性で、私のような二十代の女性が来店するのはやはり珍しいらしく、お客さんの一人がのぶちゃんを茶化し、少し高めのかすれた声でのぶちゃんがそれに答える。騒がしかったが、どこか懐かしく、優しい空間だった。のぶちゃんがヒールを直して持って来てくれたとき、私は思わず泣き出してしまい、のぶちゃんがずいぶん慌てていたことを今でも鮮明に覚えている。お酒飲める？これ、おごりね、とのぶちゃんはカルーアミルクをそっとさし出し、私の愚痴を黙って聞いてくれた。それから私は聞いてほしいと思ったことがあると、いつものぶちゃんのところへ行行って話すことにしている。

「あら、いらっしやい、久しぶりね」

何ヶ月かぶりに聞いたのぶちゃんの声は前よりさらにかすれていた。

「ちょっと、また声ひどくなってるんじゃない？お酒飲みすぎだって」

「久しぶりに来たと思ったらいきなりお説教？もうやだ

わあ」

「そう言いながらのぶちゃんは嬉しそうに、何飲む？と尋ねた。

「うーん、今日は梅酒かな、ロックで」

「あ、何かあったんでしょ、いつも梅酒なんか飲まないのに」

のぶちゃんはすぐに私の気持ちを察してしまふ。あんたは分かりやすすぎて面白くないのよね、と言われたことがあるぐらいだ。

「ばれちゃった。実はね、イルミネーション見に行くの、明後日」

「彼氏と？」

「うん、そう、昼はドライブしたいねって話してるとこ」

「良かったじゃない！」

かすれた高い声をさらに高くして、のぶちゃんは梅酒の入ったグラスを私の前に置いた。

「仲直りしたってこと？」

「うーん、仲直りというか、お詫びの印としてどっか出掛けませんかって感じかな」

「ふうん、あんたはそれで納得してるの？」

「まあ、最初は濁さないでちゃんと謝ってよって思ったけど、不器用な人だし、デートに誘うのが彼なりの精一杯の謝罪なんだなって思って。今回は私もちよっと悪かったし」

「そっか、あんたが納得してるんならいいのよ。はあ、久しぶりに来て彼氏自慢されてもねえ」

さかいちのぶゆき。のぶちゃんの本名だ。何故あだ名を本名からとったのかと、のぶちゃんに尋ねたことがある。ほら、こんな格好でこんな仕事やってるでしょ、親に申し訳ないじゃない、だからせめて名前だけは親から貰ったままで生きようと思って。のぶちゃんはあまり私と目を合わさずに答え、あんま昔のこと聞かないでよお、過去を振り返るなんて私の性分に合わないんだから、と笑った。私はそれ以来、のぶちゃんの過去について尋ねるのはやめた。私はのぶちゃんという人間が好きで、羨ましくて、信頼している。それだけなのだ、と思った。

「この前ここに来たとき、のぶちゃんに色々相談乗ってもらったから一応言っとこうと思ってさ」

私は綻ぶ口元を隠すようにして梅酒を飲む。

「それはどうも。でも、あんま調子乗らないようにね。あ

んたはすぐ人を信じすぎるんだから」

のぶちゃんはカウンターに肘をついて煙草を吸った。

「大きなお世話よ。そんなに心配ならのぶちゃんも一緒に来る？」

「あら、あんた余裕ね。そんなことしたらあたしあんたの彼氏取っちゃうわよ」

やだあ、と私は大きく口を開けて笑う。グラスの中の氷が、からんと動いた。

+++++

今日は日曜日だから暇だった。お客さんは一人も来ていない。仕方ないね、日曜だからね、と独り言を言って二箱目の煙草を開ける。日曜はいつもこんな感じだ。開店から閉店まで一人もお客さんが来ないのはいつものことだった。それでもお店を開けるのは、彼女のためだった。

彼女はとても繊細な人だ。繊細が故に優しく、強い。人一倍真面目で、相手の立場に立って物事を考えられる人間だが、男を見る目はないうだった。彼女と私が出会ったのは彼のおかげなので感謝しなければいけないのかもしれないが、彼女の話の聞いている限りではとんでもない奴だった。ドタキャンは珍しくないようだし、デリカシーがなく、彼が何か言う度に彼女は傷つけられ、私のところに来て一部始終を話して泣いて帰る。しばらくすると嬉しそうに近況報告をしに来てくれて、めでたしめでたしなのだが、またしばらくすると暗い顔で店に来る。彼女はこれを数年もの間繰り返していた。感情の浮き沈みの激しさに彼女自身もついていけないようで、ちょっともう女子辞めたいわ、と冗談まじりに彼女が呟いたことがあった。じゃあ男になる？と尋ねると、少し考えて、やっぱり女子でいいや、と笑った。そんな切ない笑顔を見て、日曜の定休日を取りやめたのだった。いくら私が女寄りだとは言っても彼女になることは出来ない。彼女の苦しみを完全に分かってあげることが出来ない。だからせめて、いつでもこの場所を開けておこうと思った。この話を聞いてほしい、他愛もない話をしたい、ただ黙ってお酒を飲みたい……どんな理由であっても、あのお店に行きたい、汚い声の派手な奴に会いたい、と思ってくれたときにいつでも来られるような場所にしておきたかったのだ。

がらんとした店内を眺めて煙草の煙をはいた。普通は日曜

日こそ営業するべきなのだろうが、大通りまで出ればオフィスが立ち並んでいるので日曜の方が人が少ない。周りのお店も日曜を定休日にしてるところが多く、たまにオートバイが通り過ぎる以外は静かだった。一人だとやっぱり寂しいわね。よっこらしよ、と椅子から降りてカウンターの下にある CD ラックの前に座り込む。ずらりと並んだ色彩豊かな CD の背表紙が、女子がお洒落をして個性を際立たせるのと同じように「私を選んで」「私を聴いて」と主張しているようで可愛かった。そんな感覚に気付いて、私は男ではなく女なのだということを遠い昔に痛感したことを思い出した。懐かしい曲でも聴こうかしら。

そのとき、扉を開ける音がした。冷たい風が入ってくる。いらっしゃい、今日も寒いわね、と言って立ち上がると、そこには俯いた彼女がいた。不思議な感じだった。彼女のために店を開けていたが、まさか本当に彼女が来るとは思っていなかった。しかも、今日は彼氏とイルミネーションを見に行く予定ではなかったのか。彼女はゆっくり歩いて、奥から二番目のいつもの席に座った。

それから彼女は何も話さなかった。いや、彼女の身に起こったことがあまりにも衝撃的すぎて整理がつかないために話せなかったのかもしれない。私は時折彼女の方を見ながら、少し離れたところで煙草を吸った。こう言ったら彼女は怒るかもしれないが、なんだか嬉しかった。他人が同じ空間にいるのにコミュニケーションをとらないというのはよっぽど親密な関係でなければ出来ない。私は信頼されているのだ、と感じて嬉しかったが、だからこそ彼女には苦しんでほしくなかった。恐らく、いや、絶対に今日も彼のせいで彼女はこんなことになっているのだ。彼女には幸せな人生を歩んでほしい。それにしても、いつから私は彼女に自分を重ねているのだろう。

さて、さっきの続きでもするかね。彼女が来てから、もう決めていた。私はもう一度 CD ラックの前に座り、懐かしいアルバムを迷わず手に取る。再生と同時に流れ出す滑らかなピアノの旋律、か弱さを打ち消すように突如現れる力強いドラム、軽やかな高音のトランペットをテナーサクソとベースが優しく包む。昔はよくレコードで聴いたものだ。

「この曲、なんて言うの？」

彼女がふと口を開いた。その表情は私が初めてこの曲を聴いたときと同じだった。

「このアルバムの二番目のやつ。この曲作った人、私と同じ境遇でね、昔よく聴いたのよねえ」

彼女に CD を渡して、私はまた少し離れたところに座った。ちらりと彼女の方を見ると彼女は CD を見つめながら、へえ、いい曲だね、と微かに笑っていた。

【千姿万態】いろいろ違った姿や形のこと。また姿や形が様々な様子

5. Active writing を目指して

報告者が目指しているのは“lifelong writing”であると先述した。それは現行の“academic writing”の指導では得られないものだと考えている。報告者は“lifelong writing”を目指しているが、その準備をする学生の姿勢や態度にスポットを当てれば“active writing”を望み、発想や手法という視点から換言すると“creative writing”を願う、ということである。それがどの程度まで達成されたのか、あるいは、この先、いつまで継続され、さらに発展させられるものなのか、それは今しばらくの試行錯誤とその省察を含めた蓄積を待たなければならない。とはいえ、現時点で報告者が感得していることについては簡単にではあるが言及しておきたい。

アカデミック・ライティングとは違う次元、フィールドでの作文を体験することにより、レポートの作成が実はそれほど難しいものではないということに受講生は次第に気付いてくれる。すなわち、レポートには課題が設定されている、書き方の作法がかなり明確に定められている、行間を読ませる工夫をしなくてよい、読者の想像力をかき立てる仕掛けを施さなくてもよい、用語の選択・類義語の探索も限定的である、等々である。アカデミック・ライティングの力を育むために、少なくともその苦手意識を払拭するためにアカデミック・ライティング以外の作文を体験することは、逆説的ではあるが、ある程度功を奏していると実感されることであり、あるいはやがてその成果が現れてくると予感されるのは興味深い。

科目担当者から見ると受講生の文章表現は確実に上達しているが、当人はそれを明確に認識することができないでいる節が感じられる。受講生の手元には14冊の「文藝通信」が残り、それを1号から順々に追っていけば自らの成長を知ることができるはずである。しかしながら、その成長を自らの言葉で表現するには、まだいくばくかの時間が必要であるかもしれない。次期以降、受講生の作品とそれに対するLAならびに科目担当者からのコメントとは別に、自らの成長の証と、その先の自信の礎として確かに「残る」ものを創案したいと考えている。

高島俊男（1999）「お言葉ですが…」文春文庫

高島俊男（2001）「お言葉ですが…② 「週刊文春」の怪」文春文庫

註

1. タイトルが作品の一部であることについては、別の号の通信にて丸谷才一の文章を引用して紙上で説明をすることになっている。
2. ほぼ全ての期で実践してきた「言葉で素描」は、通常、第三回目か四回目の授業で実施する。2013年度秋学期は予定していた授業回が天候に恵まれなかったこと、新しい試みを導入しようとしていたこと、この双方の事情により実施を見送った。
3. 2011年度秋学期には「Big Tree ～一つの鼓動を分け合いながら～」、2012年度春学期には「薫琴抄」「明日を探して」、同年度秋学期には「公園は人生の絵巻物」が編まれた。「公園は…」は、それまで相互に何の関係もなかった三作品に関連性をもたせるための工夫を施した作品で、これら四作品を併せて『なむなむの木』とのタイトルを与え、2013年4月14日に大阪で開催された「文学フリマ」に出展した。

参考文献

- ジャンニ・ロダーリ『ファンタジーの文法—物語創作法入門』窪田富男訳、ちくま文庫、1990
（原文は Gianni Rodari（1980）“LA GRAMMATICA DELLA FANTASIA — Introduzione all’arte di inventare storie—”）
- 丸谷才一（2011）「樹液そして果実」集英社
小山薫堂（2009）「恋する日本語」幻冬舎